

資料

パンジャマン・コンスタン『征服の精神と篡奪 ——ヨーロッパ文明との関わりにおいて』(五)

七 第二部 篡奪について

第三章

篡奪が最も絶対的な専制政治にもまして
害あるものとなる観点について

私が専制政治の支持者でないことは確言しよう。だがもし篡奪と強固な暴政との間で選択を迫られるのであれば、あるいは後者のほうが好ましく思えるかもわからない。

専制政治はあらゆる形態(*formes*)の自由を駆逐する。篡奪は、自分が取って代わろうとしているものを転覆させるためにこれらの「自由の」外装(*formes*)を必要とする。しかしそれら「自由の外装」を用いることで、自由は貶められるのである。公共精神の存在自体は危険だがその

堤 林 剣
堤 林 恵 訳

装いだけが必要なので、篡奪は片手で真の世論を窒息させようと国民を打ち、さらに偽りの世論という幻影を押し付けるために、もう一方の手で再び彼らを叩くのである。

失脚した大臣たちが紐を送りつける時には、⁽¹⁾死刑執行人らも犠牲者と同じように口を噤む。篡奪者が無実の人間を追放する時、彼は誹謗中傷を命じ、繰り返しかけようとする。僧主は議論を禁じ服従のみを求めるが、篡奪者は賛同の前置きとしてうわべだけの審理を命じるのである。

こうした紛い物の自由は、無秩序と奴隷制とのあらゆる害悪と一緒に混ぜ合わせる。同意の徴を無理やり引き出そうとする暴政に限界はない。穏和な人々は無関心であ

るとして、活発な人々は危険な存在として迫害される。隷従には休息がなく、興奮は歓喜をともなわない。この興奮と道徳的な生との共通点など、役に立つというよりむしろ恐ろしいだけのある技術によって、蘇生もさせぬまま死体に引き起こされるあの不気味な痙攣と生理的な生命活動との類似程度のものでしかない。

これらの賛同と称されるもの、祝詞、単調な賛辞、習慣化した貢物は、あらゆる時代を通じて同じような人々がほとんど同じ言葉によって、そして全く対照的な仕方⁽²⁾で振るまいてきたもののだが、それを発明したのは篡奪であつた。恐怖がそこに加わり、恥辱を誇り不幸に感謝するために勇氣のあらゆる外見を模倣する。なんと奇妙な策略であろう、誰一人として騙される者はいないのだ！ 誰にも畏敬の念を起こさせぬ陳腐な芝居、とうの昔に嘲笑の的となつて息絶えるべきであつたのに！ だが嘲笑は何もかもを攻撃しながら、何も破壊しない。みな嘲りによつて自立の名譽を回復したものだと思ひ込み、自らの行いを発言で否定し、発言を行動でたやすく裏切ること満足していたのだ。

政府が高圧的であればあるほど、恐怖に囚われた市民たちはますます、注文どおりの熱意で政府への賛辞を表そうとする——このことを知らぬ人があろうか！ ご覧になら

ないだろうか、震える手で人々が署名した台帳の傍らに立つ密告者と兵士たちの姿を？ 反対票を投じる人間は反逆的で反抗的だと宣言するあの布告をお読みにならなかったろうか？ 牢獄のなかで、そして恣意の支配する帝国において国民を尋問するのが、体制への反対者たちを特定し思うまま攻撃するために名簿を要求することでないなら、一体何であろう？

にもかかわらず、篡奪者はこの喝采と演説とを記録する——後世が、彼の建立した記念碑によつて彼を審判にかけらう。そして彼らは言うだろう、国民のかくも下劣であつた時代ならば、必ずやその政府も暴君的であつたに違いない、と。ローマはマルクス・アウレリウスの前ではへつらわなかつたが、ティベリウスとカラカラにはこぞつて頭を下げたのだ。

専制政治は出版の自由を窒息させるが、篡奪はそれを猿真似する。ところで、出版の自由が完全に押し潰されている時、世論は眠りにについているが騙されることはない。だが逆に買収された作家たちがその役割を奪うなら、彼らはまるで説得が必要であるかのように議論を交わし、反論されたかのように激昂し、人々が異論を唱えうるかのごとく侮辱し罵る。彼らの不条理な中傷は乱暴きわまりない有罪

宣告を導き、残酷な冷笑が不当な量刑の前触れとなる。彼らの身振り手振りつきの証明が犠牲者たちの反抗を我々に信じさせるのだ——さながら、野蛮人が自分たちの拷問する捕虜達の周りで踊っているのを遠巻きに眺めながら、彼らは、彼らによってこれから苛まれようとしている不幸な人々を相手に戦っているのだ、と言うかのように。

一言で云えば、専制政治は沈黙によって支配し、人々に口を噤む権利を残しておくのである。だが篡奪は人々に強いて喋らせる。思想の奥底にある聖域まで彼らを追い駆け、良心に対して嘘を吐かせ、被抑圧者に残された沈黙を守るという最後の慰めさえも奪ってしまうのだ。

ある国民が奴隷に身を落とさざるをえないながらも、なお品性を墮落させていなければ、事態を少しでも改善することは可能である。もし何らかの幸運な状況がその可能性を覗かせたなら、自分がそれに値することを示すのだ。専制政治はこの機会を人類に許している。フェリペ二世の圧制もアルバ公の処刑も高潔なオランダ人たちを墮落させはしなかった。しかし篡奪は国民を抑圧すると同時に、その品位を引き下げる。自分たちの尊ぶものを踏み躪り、軽蔑しているものに阿り、自分自身を蔑むことに慣れさせる。そして少しでも篡奪が永く支配すれば、その崩壊のあとで

さえ、一切の自由と改善が不可能になるのである。コモドウスは打ち倒された。だが皇帝の親衛隊が帝国を競売にかけ、国民はその買手に服従した。

幾世紀ものあいだ人々が我々に誉めそやしてきた篡奪者たちのことを考えるにつけ、私があっけにとられるのは唯一、人々が彼らに向ける称賛だけである。カエサル、そしてアウグストゥスと呼ばれたかのオクタヴィアヌスはこうした人物の典型といえよう。彼らはローマにおいて卓越していたものの一切を禁止することから始め、続いて高貴なものをすべてを墮落させ、仕上げにウィティリウス、ドミティアヌス、ヘリオガバルス、そしてヴァンダル族とゴート族を世界への遺産として去っていったのである。

第四章 文明の栄える我々の時代においては 篡奪の存続しえぬこと

このような篡奪の絵図のあとでは、^③それが今日において征服の体制に負けず劣らぬ時代錯誤であることを示すのが慰めとなろう。

共和政は、各市民らが自分たちの権利について抱く深い感情によって、また自由の享受が人間にもたらす幸福、理性、静穏と精力とのゆえに存立するものである。君主政は

時と慣習、そして過ぎ去った世代の神聖さによって支えられる。だが篡奪は篡奪者個人が握る覇権 (suprematie) によってしか成り立ちえない。

ところで人類の歴史上には、篡奪を可能とするために必要な覇権が存在を許容されなかったような時代がいくつか見られる。それはギリシアにおけるペイシストラトスの追放からマケドニアのフィリッポスによる支配までの一時期であり、あるいはタルクイニウスの失墜から内乱までというローマの最初の五世紀間であった。

ギリシアでは、ある個性をそなえた人々が群を抜きん出て位を昇り、人民を導いていた。それは才能による輝かしい支配ではあったが、争いと奪取の対象となるはかない統治でもあった。ペリクレスは一度ならず支配権が自分の手を離れそうになるのを目にしながらも、伝染病に倒れたがゆえに権力の頂点で死ぬこととなった。ミルティアデス、アリストイデス、テミストクレス、アルキビアデスは、動乱らしい動乱もないままに権力を掌握し、そしてそれを見失った。

ローマにおいては個々人の覇権の不在がより際立っている。五世紀間というものの、この共和国の偉大な人々からなる巨大な群集のうちに、彼らを長期にわたって支配したよ

うな人物の名を見出すことはできないのだ。

しかしそれとは反対に他の時代には、人民の政府も最初に名乗り出た個人に掌握されているかのように思われる。才覚と豪胆さに溢れる十人の野心家たちがローマ共和国の人民を服従させようと虚しい試みを繰り返した。カエサルが王座への道に至るためには、二十年におよぶ危険と苦役、そして勝利が必要であった。そしてその座に昇る直前に暗殺者の手にかかって死んだ。クラウディウスも絨毯の影に身を隠したが兵士たちによって発見された。だが彼は皇帝であり、十四年もの間君臨し続けたのである。

この違いは、永く続いた奮闘の果てに人々を捉える倦怠ばかりに由来するものではない。それは文明の歩みにも結び付いているのだ。

人類がいまだ無知と粗野の深い淵に沈みこみ、ほとんど一切の道徳的能力を持たず、同様にまったくといっていいほど知識を、したがつて物理的な手段を欠いている時には特別優れた美点を具えた人物ばかりか偶然によって群集の前に投げ出されたような人間にさえ、諸民族はまるで家畜の群れのように付き従う。知性が進歩を遂げるに依じて、理性は偶然の正当性に疑いを見出し、熟慮は比較を通じていかなる排他的な優位とも対立する平等性を個々人のあい

だに認識していく。

これこそが、アリストテレスをして彼の時代には真の王国と呼びうるものはほとんど存在しない、と言わしめたのである。そして彼はこう続けた——「才ある者も今日では複数の同輩を見出すのであり、指揮という特権を自分一人のために要求しうるほど他の人間より優れた美徳を有する者など誰もいない」。^{*}このくだりは、スタゲイラの哲学者がそれをアレクサンドロスのもとで綴ったというだけに、ますます瞠目に値する。

* アリストテレス『政治学』V.10.

野蛮なベルシャ人を従えるためにキュロスが費やした苦役と才覚とは、あるいは十六世紀のイタリアにおいて小さな僭主が自分の篡奪した権力を保持するのに必要としたものより少なかったかもしれない。マキアヴェリ^{マキアヴェリ}の助言さえもがこの増大する困難を証言している。

個人の覇権に障害を設けるのは、必ずしも〔知識の〕程度ではなく、知識の均等な広がりにはかならない。このことは、先に我々が述べた点——各時代は自分の代表者として奉仕する人物を待ち望む、という主張と少しも対立しない。ただ、すべての時代がそうした人物を見出すというわけでもない。文明が進歩すればするほど、これを代表する

のは難しさを増していくのである。

二十年前のフランスとヨーロッパの情勢は、この点において前述のようなギリシアやローマの状況に似通っていた。等し並みに開明された人々がかくも多く存在していたために、何人たりとも自らの個人的な優越から排他的な統治権を導き出すことはかなわなかった。そして同様に我々の苦難における最初の十年間は、誰であろうと擯^{ぬき}んでた地位につくことはできなかったのである。

不幸にも、こうした時代においては常に、ある危険が人類を脅かそうとする。大量の冷えた液体が沸騰した液体に注がれるとその熱は弱まる——それと同じように、文明化された国民が蛮族の侵略をうけると、あるいは無知な大衆がその中心に傾^たれ込みその運命を握ると、その歩みは止み、文明は後退りを始めるのだ。

ギリシアにとってそれは、マケドニアの影響の浸透であった。ローマにとっては披征服民の相次ぐ併合であった。そして全ローマ帝国にとっては北方民族の侵入がこの種の出来事を意味していた。個人の覇権、したがって篡奪は再び可能性を取り戻す。皇帝を生み出すのはほばいつでも蛮族からなる軍団だったのである。

フランスにおいては、革命の騷擾が政府の中に無教養な

階級を呼び込み教養層の氣を挫いた。そしてこの新しき蜜族の侵入は同一の効果を及ぼしたが、それが大した持続性を持たずに済んだのは、不均衡がさほど激しくなかったためである。我々のうちで篡奪を画した人物は、ひととき文明の道から逸れることを余儀なくされた。彼は他の時代へと、より無知な諸民族へと廻った。彼はそこにおいて自らの優位性の基礎を築いたのだ。ヨーロッパの中心に無知と野蠻とを導きいれることができなかったがゆえに、ヨーロッパ人を野蠻と無知に改変しうるかどうかを知らうとして彼は人々をアフリカへと引連れていった。⁽⁴⁾そしてその權威を保持するために、彼はヨーロッパを退歩させようとしたのである。

かつて諸国民はある人物らのために自らを犠牲にし、そこから栄光を勝ち取った。我々の時代においてそうした人物は、自分があたかも国民の利益と善のためにのみ行動しているかのように装わざるをえない。時に彼らは自分たちについて、自分たちのような存在に対する人々の義務について語り、カンピセスやクセルクス以来廃れきっていた体系を甦らせようとする。だが誰も彼らの言うままに応えることはなく、追従者たちにさえ沈黙によって見放され、否が応でも平等の尊重という偽善の殻に閉じ籠らざるをえ

ない。

もし外見上は自分たちを抑圧している篡奪者たちに服従していようと、こうした国民の陰に潜んだ部分をつぶさに眺めていたならば、彼らの眼があるぼんやりとした直観に従うようにして、篡奪者の倒れる未来の瞬間へと向けられていくことに気づいただろう。彼らの熱狂は分析と嘲りの奇妙な調合である。自分自身の確信に信をおかず、喝采に酔っ払うと同時に嘲りで埋め合わせをしようと努めつつ、自らその威光が消え去る時を予感しているのだ。

現代における征服の体制および篡奪の二重の不可能性を、事実がどの程度証明しているかご覧になりたいだろうか？この六カ月のあいだに我々の眼の前で次々と折り重なるように生じた出来事をお考えいただきたい。征服はヨーロッパの広範な領土にわたって篡奪を打ち立てた。そして決してそれを承認せぬことこそ利益となつたはずの人々によって承認され、正当とみなされたこの篡奪は、自らを強化するのに役立つすべての形式を身に纏うことにした。ある時は国民を脅かし、ある時は阿つた。恐怖を引き起こす強大な軍隊、精神を眩ます詭弁、良心に平安を与える条約をそれぞれ掻き集めることに成功した。篡奪がかせいだ数年という時間は、すでにその出発点を覆い隠し始めていた。

打倒された政府は共和政であれ君主政であれ、目に見えるところでは希望ひとつ、方策ひとつ手にしていなかった。だがそれらは人々の心の中で生き続けていたのだ。数多くの敗戦もそれを根絶することはできなかった。そしてたつた一つの戦いが勝ち取られるや否や、篡奪は自分が至るところから崩壊しはじめていることに気づくこととなった。今となつては、この篡奪がかつて何らの抵抗もなく支配していた国々に旅行者がその痕跡を認めることさえ難しいであらう。

第五章

篡奪が力によって生き延びることは可能ではないのか？

しかし篡奪が力によって永らえることはないのだろうか？ 他のすべての政府と同じように、自由にできる牢番と鉄鎖、そして兵士たちを手にしているのではないのか？ 持続性を獲得するためにほかに必要なものがあるだろうか？

こうした議論は、篡奪が王座を占め片手に黄金、片手に斧を構えていた頃から驚くほど多様な仕方で繰り返されてきたものである。経験自体もこの主張に有利な証言をするかのように思える。にもかかわらず、私はあえてこの経験

に疑問を呈することとしよう。

これらの兵士、牢番、鎖は、正当な政府にとつては極端な最終手段であるが、篡奪にとつては、それが至るところで障害に遭遇するゆえ、常套手段となる。前者のごとき政府は臣民たちに対し絶対的権力（despotisme）の行使を間歇的に危機的状況でしか感じさせないが、この横暴は篡奪にとつて常態であり、日常的な実践なのである。

ところで、絶対的権力の理論が作家や雄弁家たちに自らを思弁的に擁護させているのは、あらゆる過ちを犯しうる言葉がその従順で扱いやすい助手となるからにはかならない。しかし絶対的権力の恒常的な行使は今日においては不可能である。それは征服や篡奪と並ぶ、第三のアナクロニズムなのだ。

この主張をいまい少し展開してみよう。まずは、なぜ人々は我々の世代がこうした専制を甘受すると考えたのか、と問おう。それはこの世代が、無知と強情、粗野とともにさまざまな形態の——すでに不可能となつたはずの——自由を与えられ、然るのち自由の名において、歴史がその記憶を伝えている他のいかなる専制よりも恐るべき暴政を見せつけられたからなのである。⁽⁵⁾ こうした世代が自由に対し、自分たちを最も卑しむべき隷従へと突き落とした絶対的な

恐怖を抱いたとしても驚くにはあたらないだろう。

この専制政治は幸いにも、そしてむしろ感謝されるべきことに、我々をこの恥ずべき過ちから癒すために最良の処置を施した。ともかくも、不条理にも自由と称されていた代物と同じくらいの災いを自らがもたらしたことを、さまざまな仕方、一切の偽装も小細工もなしに証明してみせたのである。したがって、今やこの論点に関して何らかの合理的な考えが突破口を見出すべき時が来たのだ。

第六章

前世紀末において人々に示された種類の自由について⁶⁾

前世紀の終わりに人々へ提示された自由は、古代の共和政から借りて来られた代物であった。さて、古代人の好戦的な傾向の原因として本書の第一部で明らかにした諸状況は、もはや我々には不可能な類の自由を可能にする際にも少なからぬ役割を果たしたのである。

この自由は、個人の自立を平穩無事に享受することよりもむしろ集合的権力への積極的な参加を意味していた。そしてその参加を確かなものとするためには、こうした享受の大部分を市民らが犠牲にすることさえ必要であった。だが、諸国民が到達した当代においてこのような犠牲を要求

することは馬鹿げており、実現することはまず不可能である。

古代の共和国では、その領土の小ささゆえに市民一人ひとりが政治的に著しい影響力を有していた。ポリスの権利を行使することこそが関心事であり、したがってすべての人の楽しみでもあった。全市民が法の制定に参与し、判決を宣告し、戦争と平和の決定を下していた。国民主権に対して個人が果たす役割は現在のごとき抽象的想定ではなかった——各人の意志は現実の影響力を具えていたのである。この意志を実行に移すことは一つの強い喜びであり、繰り返し享受された。このゆえに、古代人たちは自らの政治的影響力と国家行政における役割を保持するために、すすんでその私的な自立性を投げ出すことができたのである。

この放棄は欠かすことのできぬものだった。ある国民にいつそう広範囲にわたる政治的権利を与えるには、つまり各市民に主権の一端を担わせるためには、平等を保ち財産の増大を妨げるような諸制度が他者に擢んであることを禁じ、富と才能、時には美德の影響にさえも反対しなければならぬからだ。^{*}だが一切のこうした制度は自由を制限し、個人の安全を危うくするものである。

^{*} 陶片追放、橄欖追放、土地均分法、検閲、等々、等々。

また一方、我々が市民的自由（liberté civile）と名づけるものは、ほとんどの古代人の与り知らぬところであつた。ギリシアの共和国はみな、よしアテナイを例外とするにせよ、諸個人をほぼ無制限の社会的権限に服従させていたのである。個人に対する同様の束縛は全盛期のローマをも特徴づけていた。市民は自らが帰属する国家の一種の奴隷となり、立法者や主権者の決定にその身を捧げつくした。彼はそうした人々に自らの行為すべてを監視しその意志を強制する権利を許していたが、それは順番さえ巡ってくれば彼自身がこの立法者、主権者たりうるからであつた。市民一人ひとりが権力者となるからこそ、彼は小規模な国家における投票権の対価に誇りを持ちえていたのである。そして自分自身の価値に対するこのような認識が彼にとっては十分な埋め合わせであつた。

†より詳しい証拠としては、コンドルセ『公共の制度に関する報告書』（*Mémoires sur l'Instruction publique*）、およびシスモンド・シスモンディの『イタリア共和政史』（*Histoire des Républiques Italiennes*）IV, 370を参照。著者の際立った才能と等しく高貴な品格をそなえたこの書物を引用できることは、私にとって喜びである。

‡近代の改革者たちが模範とするのをあえて避けたのがアテ

ナイであつた、というのはずいぶんと奇妙なことである。アテナイがあまりに我々に似すぎていた、というのがその理由なのだ。彼らはより多くの利点を引き出すために、よりいっそうの相違を求めたのである。アテナイ人たちの実に近代的な性格について得心したいと望む読者は、何よりクセノフォンとイソクラテスを参照することができよう。

近代の諸国家においてその様相は一変する。領土は古代共和国のそれよりはるかに広がり、その結果住民の大部分は、いかなる形態にせよ彼らの受け容れている政府に対し何らの積極的な役割も担っていない。彼らはせいぜい代表によつて、つまり虚構の手段によつて主権の行使に関与するよう求められるのみである。

古代人が理解したところの国民に与えられる自由の利点とは、実際に統治者の一員となることにある。陶醉させるような、それでいて確固とした喜びという、現実の利益だ。近代人の間で自由が人々に提供する利点は、代表され、また自分の選択を通じてこの代表の過程に貢献することである。それは確かに利益であろう、なぜなら一個の保証だからだ。だが直接に味わうことのできる喜びはいくぶん力強さが欠けている。そこにはいかなる権力の喜びも享受もない——内省的な快楽である。古代人たちのそれは活動と

しての喜びだった。前者のほうが魅力薄いことは明らかであろう。その獲得と保持を理由にして人々に同じだけの犠牲を求めることはできない。

同時に、この犠牲はより多くの苦痛をとまなうこととなるだろう。文明の進歩、時代の商業的傾向、諸国民間の交流は、個々人の幸福にいたる手段を無限なまでに増大させ多様化させた。幸福であるために人々が望むのは、彼らの仕事、企て、活動領域、空想に関わるすべてのものについて、完全無欠の自立性のうちに放っておかれることだけなのだ。

古代人は自分たちの公的存在により多くの喜びを見出していたし、私的な存在としてはさほどのものを感じていなかった。したがって彼らが政治的自由のために個人的自由を犠牲にする時には、少ない損失でより大事なものを手にしていたのである。近代人の喜びはほとんどすべてが私的存在のなかに抱懷されている。常に権力から排除される圧倒的多数者は、必然的にごくわずかな関心しか自分の公的存在に見出さない。ゆえに古代人を模倣するとき、近代人はより多くの犠牲を捧げながらより少ないものしか受取らないのである。

かつてに比べ、社会的関係性ははるかに複雑かつ広範に

なった。敵同士と思われる集団でさえ、意識されることはないものの、解くことのできない繋がりによって結び付けられている。財産は人間の存立基盤とより緊密に関連づけられ、それ〔財産〕への打撃はより大きな苦痛をもたらすことになる。

我々は、知識において獲得したものを想像において失ったのである。そしてそれゆえに、我々は精神の高揚を長続きさせることさえできない。古代人たちは道徳的生におけるまっつき青年期の只中であつた。我々が生きるのは壮年期、もしかすると老年期であろうか。我々はどこに行くにも、経験から生まれた何らかの底意を引き摺っており、それが情熱を冷ましてしまう。熱中の第一の条件とは、あまり細かに自分を精査せぬことである。ところが我々は騙されることに、何より騙されやすいと思われることに大きな不安を抱えているがゆえに、もつとも激しい観念にとらわれているときでさえ自分自身を観察し続けている。古代人は一切の事象に対して、揺るがぬ確信を抱いていた。我々はいえ、ほとんど何についても、気を紛らわせてくれるかと虚しく期待をかける不完全なものへの、あやふやで移ろいやすい信念しか持っていないのだ。

幻想という言葉がいかなる古代語にも存在しないのは、

事物がもはや存在しなくなった時に初めてこの単語が生み出されるからである。

世論に力強く訴えかけようとするならば、立法者は一切の慣習の転覆を、その試みにいたるまで完全に放棄せねばならない。^{*} リュクルゴスの時代は去り、ヌマはもはや存在しない。

^{*} モンテスキューが述べている。「民衆政体のもとに生活していたギリシアの政治家たちは、徳の力以外にはこの政体を持続させる力を認めていなかった。今日の政治家たちがわれわれに語ることにいえば、手工製造業や商業や財政や富、さらには奢侈についてだけである。』『法の精神』Ⅲ、3（前掲訳書、七二頁）。彼はこの相違を共和政と君主政とに帰している——だが真にその因を帰せられるべきは、古代と近代との対立する精神である。共和国の市民も君主国の臣民も、誰もがみな快楽を求め、社会の現状においてはそれを欲せずにおられる人間など一人として存在しないのである。

今日においては、奴隷のごとき人民からスパルタ人をつくり出すほうが、自由（人）によってスパルタ人を形成するよりたやすからう。かつて自由が存在していたところでは、人々も窮乏を耐え忍ぶことを知っていた。今や困窮のあるところではどこでも、人々がこれを甘受するために奴

隷状態が求められるのだ。

近代では、もつとも自由に愛着を持つ国民は、同時にもつとも快楽を愛する国民でもある。彼らは何よりも自由に執着する、そこに快楽の保証を見出すに充分なほど、彼らは開明を遂げているのだから。

- (1) 紐は、絞首のために使用される絹紐を意味する。
- (2) 初版では言い回しが若干異なっている。初版と第四版の原文は以下のとおりである。初版：「C'est l'usurpation qui a inventé cette prétendue sanction du peuple, ces adresses d'adhésion, tribut monotone, qu'à toutes les époques, les mêmes hommes prodiguent aux mesures les plus opposées。」第四版：「C'est l'usurpation qui a inventé ces prétendues sanctions, ces adresses, ces félicitations monotones, tribut habituel qu'à toutes les époques, les mêmes hommes prodiguent, presque dans les mêmes mots, aux mesures les plus opposées。」
- (3) 初版では「『』のような篡奪の絵図」（ce tableau de l'usurpation）が「『』のような篡奪の正確な絵図」（ce tableau fidèle de l'usurpation）となった。
- (4) 二つで暗に言及されているのはナポレオンのエジプト遠征とその有害な作用である。
- (5) この箇所は、初版ではより冗長な文章となっている。

以上を参照。“Cette assertion surprendra peut-être un assez grand nombre de lecteurs. Je lui donnerai en conséquence quelques développemens. Je dirai d’abord pourquoi l’on a pu croire que notre génération était disposée à se résigner au despotisme. Je montrerai que c’est parce qu’on lui a offert avec ignorance, obstination, et rudesse [...]”

- (6) 本章から第八章までの議論は、手稿『政治原理論』(*Principes de politique*, pp. 417–455) の記述を「敷衍」している。